

5) その他

グアテマラの染織、ペルー先史文化の染織、パナマ・コスタリカの先史土器や染織に関する研究が、大学その他の研究機関に属さない研究者によって行われているが、文化人類学のなかの物質文化研究というよりも、美術的あるいは技術的研究という性格である。

ほかに啓蒙活動の部類に入るが、東大の文化人類学者の積極的協力をもとにした展覧会が数多く実施され、アンデス、エクアドル、コロンビア、メソアメリカ、アマゾニアの先史文化や民族文化が日本で紹介されてきた経緯もある。

文 学 木 村 榮 一

この10年ほどの間に翻訳、紹介された現代ラテンアメリカ文学の作品は驚くほどの数にのぼるが、周知のようにその嚆矢となったのが1968年に邦訳の出したホルヘ・ルイス・ボルヘスの『伝奇集』と『不死の人』である。また同年に、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『緑の法王』の翻訳も出ている。アストゥリアスはともかく、ボルヘスがこの二作品の紹介を機に一般の読者にもその名を知られるようになり、以来彼の作品が次々に翻訳されて、現在では文学的市民権とでも呼びうるような資格を獲得していることは周知のとおりである。

70年に入るとM・A・アストゥリアスの『大統領閣下』やガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』が翻訳出版され、その一方で短編選集が編まれたり、あちこちの文芸雑誌でラテンアメリカの現代文学や個々の作家を対象にした特集が組まれたりして、ボルヘス以外の作家の紹介、翻訳が始まり、ようやく一般の読者の間にラテンアメリカ文学に対する関心が高まり始めた。これは先にものべたように1970年代のことだが、ラテンアメリカ諸国では60年代に入ると主として小説の分野で、爆発的な勢いで話題作、問題作が発表され、これが世界の注目を集めて〈ラテンアメリカ文学ブーム〉と呼ばれるようになったことはよく知られている。その波が70年代に入ってようやく日本にも

及び始めたと言ってよいだろう。

いくつかの出版社が積極的にラテンアメリカの現代文学の紹介に乗り出したこともあって、以来僅かな期間に数多くの作品が邦訳されてきたが、ラテンアメリカのほぼ全域にわたって次々にすぐれた作家が登場してきたことを考えてみれば、その紹介はまだ端緒についたばかりだと言っても過言ではない。

これまですでに先に挙げたボルヘス、アストゥリアス、ガルシア・マルケスをはじめ、アレホ・カルペンティエル、フリオ・コルタサル、ファン・ルルフォ、ホセ・ドノソ、カルロス・フエンテス、マリオ・バルガス・リョサ、ギリエルモ・カブレラ・インファンテ、セベロ・サルドゥイ、マヌエル・プイグ、あるいはオクタビオ・パス、パブロ・ネルーダ、ニコール・パーラといった作家、詩人の作品が邦訳されているが、今後さらにこの名表が増えるとともに、未紹介の重要な作品の翻訳もなされて行くと思われる。

上記以外にもメキシコ革命小説の傑作と言われるマリアーノ・アスエラの『虐げられし人々』や原住民小説の代表作として知られるホルヘ・イカーサの『ウアシプンゴ』などが邦訳されているが、その数はまだ微々たるもので、現在の翻訳、紹介の主流となっているのはいわゆるラテン・アメリカの〈新しい小説〉と呼ばれる作品である。

こうした〈新しい小説〉の作家たちが主として紹介されるというのには、やはりそれなりの理由があると考えられる。ひとつには、従来からその危機が囁かれて久しい小説が近年袋小路に入り込んで、新しい道を見出せずにいたところへ、豊饒な生命力と創造性にあふれたラテンアメリカの現代小説が現われ、欧米をはじめ世界各国の注目を集めたことがその理由としてあげられる。〈ブーム〉というあまり聞きなりのよくない言葉で総称される現代ラテンアメリカ文学、とくにその小説は、しかしけっして一時的な流行で終わるものではない。新大陸の現代作家たちは欧米の文学から多くのものを学び取りつつ、言語、文体、手法、結構などあらゆる面で小説を変革し、新たな可能性にみちた小説の地平を切り開いており、彼らの作品は小説というジャンルがまだ若々しい生命と種々の可能性にみちたものであることよりの証明になっている。また、日本の作家や文学研究者がラテンアメリカの現代小説を読んで衝撃を受けたという言葉をよく耳にするが、その理由は今のべたことのうちに求められるはず

である。

その意味でも、今後の紹介、翻訳が大いに待たれるところだが、同時にこれまでで紹介されたものはラテンアメリカ文学のほんの一端でしかないということも忘れてはならない。たとえば、独立後の文学だけを取り上げてみても、ルベン・ダリーオを中心とする〈モデルニスモ〉の詩の運動、ピセンテ・ウイドブロ、セサル・パリュェッホ、あるいはオクタビオ・パスに代表される前衛詩、さらにまたインディヘニスモの文学、カリブ海の黒人小説、ガウチョ文学、メキシコ革命小説、自然主義小説、ラ・プラタ河の実存主義小説などがあり、これらはほとんど未紹介のまま残されている。さらに、文学史や種々の文学運動、あるいは重要な作家の個別研究などにもほとんど手がつけられておらず、今後に残された課題は大きいものがあると言えるだろう。

歴史学 染田秀藤

日本におけるラテンアメリカ研究の動向に関しては、すでにいくつかの報告が海外で発表されている。例えば、上智大学のグスタボ・アンドラーデ教授の“Latin American Studies in Japan”(*Latin American Research Review*, Vol. VIII, No. 1, Spring-1973, pp. 147-156), 国立国会図書館の三谷弘氏の“Latin American Studies in Japan”(*Handbook of Latin American Studies*, No. 27, Social Science, Gainesville, Univ. of Florida Press, 1965, pp. 457-463), およびアジア経済研究所の小坂允雄氏の“Latin American Studies and Library Materials in Japan, 1969. —A Preliminary Report—”(15 th. Seminar on the Acquisition of Latin American Library Materials—Final Report and Working Papers, Vol. II Pan American Union, Washington, 1970, pp. 209-216)などがある。前者二篇は歴史にかぎらず、ラテンアメリカに関するあらゆる分野(とくに社会科学)の研究動向や学会・研究所を紹介したものであり、後者はラテンアメリカ関係図書の出刊状況に関する報告である。また、ごく最近、国本伊代氏が“Investigaciones y estudios históricos sobre América Latina en Japón: situación presente